子どもの一貫した学びのつながりを支える教育の推進
――幼保小・小中の接続期に視点を当てて――

桐生市立新里北小学校　教諭　關　百合香

Ⅰ　はじめに

新小学校学習指導要領(2017:2)において、「幼児期の教育の基礎の上に，中学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら」児童が学ぶ環境を整え、「一人一人の資質・能力を伸ばせるようにしていくこと」は、教職員をはじめとし、家庭・地域等様々な立場から児童や学校に関わる大人に期待される役割であると明文化されている。同時に、初等中等教育の一貫した学びの充実を図る重要項目として、小学校入学当初における生活科を中心とした「スタートカリキュラム」の充実と、幼小、小中といった学校段階間の円滑な接続や教科等横断的な学習を重視することも掲げられている。さらに、教育課程の編成においては、「各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする」としている。本県においては、第２期群馬県教育振興基本計画(2014)の中で、幼稚園や保育所等と小学校との連携・接続において、具体的な達成目標を掲げその取組を推進している。

これらのことから、教育的なつながりを見通し、学校の地域的な背景やこれまでに積み上げられてきた教育活動を生かしていくことは、より地域や子どもの実態に即した教育及び円滑な接続の実現へとつながり、子どもたちが安心して学校生活を送る基盤をつくるものと考えられる。しかし、群馬県においては、第２期群馬県教育振興基本計画からも、この幼保小中の子どもの一貫した学びのつながりを支える教育実践は、これから進展を図っていく段階であると言える。本校の学校区内の幼保小の連携及び小中の連携においては、いずれも一対多の施設分離型であるという連携を図りにくい地理的な要因もあり、交流はほぼ行われていない実情がある。これら地域的な状況を踏まえつつ、現在行われている諸行事や教育活動等を幼保小中連携の視点から見直し整理していくとともに、まずは小学校の教職員が、各学校段階間の教育の相違点や共通点を理解し、子どもの発達や学びのつながりを踏まえて指導・支援に生かすことができる協働体制を築くことが急務であると考えた。子どもの一貫した学びのつながりを支える教育とは、すなわち子どものそれまでの学びの背景を知り、今後の学びを見通しながら今の学びを重ねていくことである。そして、子どもの育ちや学びの背景を理解し大切にするということは、児童・生徒理解であり、子ども一人一人の可能性を引き出し、未来へとつなげ伸ばしていくことの基軸ともなる重要な部分であると考える。本研究では、この子どもの一貫した学びのつながりを支える教育の充実を目指し実践を行うこととする。

Ⅱ　研究のねらい

幼保小・小中の接続期に視点を当て、子どもの一貫した学びのつながりを支える教育の推進を行うことの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　円滑な接続を図るための視点

円滑な接続を目指すためには、新１年生が安心感を持ち接続期を過ごせるよう温か

く迎え入れる環境整備を行うとともに、６年生が見通しと安心感を持ち進学できるよう環境整備を行うという視点も持つこと、迎え入れ送り出す、という二つの側面からとらえる必要がある。また、二つの接続期のうち、子どもの発達段階を考慮すると、幼保小の接続期に、よりきめ細かな手立てが必要であると考えた。特に、小学校生活のスタートである幼保小の接続期は小学校生活の基盤づくりともなる大切な時期である。円滑な接続により、児童が安心感を持ち小学校生活を送ってほしいとの願いから、本研究では、幼保小連携に重点を置いて実践を進めることとした。また、円滑な接続を目指し、実践は入学前の年度から取り組む。本研究を進めるに当たっての構想を図１に表す。

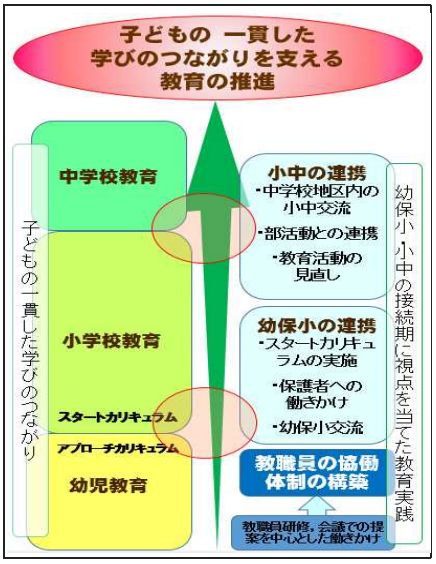

図１　研究構想図

(2)　対象とする幼保小の接続期間

入学に際して、子どもたちは期待と不安を抱いている。入学前後にきめ細かな支援を行うことにより、幼児期からの学びを小学校への学びへ円滑につなげることができると考える。本研究では、年長児の９月から小学校１年生３月末までを幼保小の接続期間の対象とする。この間に、きめ細かな支援としてアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを意識して実践を行う。両カリキュラムは、国立教育政策研究所「幼小接続期カリキュラム全国自治体調査」において、以下のように定義されている。

アプローチカリキュラム 就学前の幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにするとともに，幼児期の学びが小学校の生活や学習で生かされてつながるように工夫された５歳児のカリキュラム スタートカリキュラム 幼児期の育ちや学びを踏まえて,小学校の授業を中心とした学習へうまくつなげるため，小学校入学後に実施される合科的・関連的カリキュラム

本研究では、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムとを、交流者双方に学びが生まれる互恵的な幼保小交流により関連付ける。これらの交流を通し年長児の小学校入学へ向けた安心感の素地づくりを行うとともに、１年生の成長・自立を促す。

2　実践

(1)　幼保小連携の側面から

幼保小の接続に当たり、本研究では幼保小の接続期を、入学前の準備(アプローチ的側面)と、入学後のきめ細かな支援(スタートカリキュラムの実践)との両側面からとらえ、取り組む。

①　アプローチ的側面(平成28年度の実践)

入学前の準備として、校内の協働体制づくり及び幼保小の交流並びに年長児の保護者への働きかけ等を通し、年長児が小学校への期待感を高めるとともに、安心して小学校入学を迎えられることを目指し実践に取り組んだ。

ア　校内の協働体制づくり

異校種との接続を行うには、校内の共通理解を図る必要がある。教職員の協働体制を構築することにより、円滑な接続を進めやすい環境が整えらる。また、人事上の交流がある小中の学校間に比べ、幼児教育については、その教育の詳細が見えにくいと

いう課題も浮かび上がった。筆者も含め、本校教職員も幼児教育等について理解を深める必要があった。そこで、幼児教育を含めた接続期に関する教材を作成・活用し理解を図ることとした。教材の作成に当たっては、本校の位置する町内の地域をはじめとする小学校教諭、幼稚園等施設の保育者、本校の低学年の保護者の実態把握と、継続した保育参観から得た情報を基に編集を進め、教材を作成した（平成28年度長期研修員作成資料）。これらの教材を活用して教職員研修を実施した（図２）。内容は、幼児教育の理解、スタートカリキュラムの編成方法、組織的な対応についてである。幼児教育、スタートカリキュラムの編成方法などの理解を図りながら、組織的な対応のよさについても再確認できる機会とした。

図２　研修中の様子

イ　研究協力園との交流

本校への入学児童が多い学校区内の幼稚園、保育所に連携を依頼し、幼保小の交流を行える体制を整えた。連携を行う際に留意したことは、段階を追った交流の実施である。交流を通し、年長児の小学校への期待感を高め「安心感の素地づくり」を目指した。３学期の交流では、入学説明会の機会を利用し入学予定の年長児及びその保護者を対象に交流を行った。間もなく迎える小学校生活について年長児が見通しを持てるよう、ランドセル体験や机に座って１年生に教えてもらいながら自分の名前を書く等の内容で実施した(図３)。１年生は新１年生とペアを組み、新１年生へ支援を行った。活動後１年生は「新しい１年生、楽しんでくれたかな。僕、一生懸命頑張ったんだよ」などの発言に代表されるように、新１年生が楽しめるようにと精一杯頑張る１年生の姿が多く見られた。また、この交流日は、年長児と１年生の交流だけなく、校内への働きかけにより年長児（５歳児）と５年生による５－５交流も実現し、次年度の関わりを見通した取組へと広がりを見せた。５－５交流では、５年生による年長児とその保護者への校舎案内や入学後の教室の壁面飾りを年長児と共に作成するなど、新１年生が安心して入学できるように、との願いを基に内容を構成し交流を持った(図４)。５年生は、交流前から「先生、私が組む新１年生は誰ですか」や当日も新１年生の受付場所では何度も外をのぞき「新１年生、早く来ないかな」などと発言し、交流を心待ちにする姿が見られた。幼保小の連携・交流は、関わった１年生にとっても５年生にとっても大きな成長が見られた。特に１年生は、交流を通し新１年生を迎え入れる側として接することで、回を重ねるごとにどのように関わったら良いか自分で考え行動に移せるようになった。これは、１回目の感想「新しい１年生に教えるのが、すごく楽しかったです」から２回目「教えるのも良くできました。みんなが楽しそうだったので良かったと思います」などの、自分の気持ちが中心の感想から、相手を思いやった感想への変化からも読み取ることができる。また同様に、５年生からは「目を合わせてゆっくりと話しかけ、教室案内などを分かりやすく紹介できた」「手をつなぎ、階段などでは手すり側にするなど、安全面に気をつけて学校案内ができた」などの記述があった。これらの記述や腰をかがめて新１年生に語りかける５年生の姿などからも配慮しながら交流を行っていた事が推察される。

図３　１年生との交流

図４　５－５交流

また「新１年生に安心感を持ってもらえるように、優しい言葉を掛けたり分かりやすく教えたりすることができたか」という自己評価では、92.3%の児童が「良くできた・できた」と回答した。交流中にこやかな表情で生き生きと、一生懸命に新１年生に対応する姿からも新６年生としての自覚が芽生えたと感じることができた。交流後には５年担任から「子どもたちの『最高学年になる』という意識の変化が見られ交流は効果的であった。来年度へ向け総合的な学習の単元を見直し、今回の学習を教育課程に『最高学年になるために』として位置付けられるよう新たな単元の作成を始めている」との発言があった。これらを受け、平成28年度中に１年生と５年生の教育課程の見直し・刷新を行い、継続的な実践を行えるよう整備した。

ウ　保護者への働きかけ

保護者の安心感は、子どもたちの安心感を支える大切な要素であるという考えの下に働きかけを実施した。目指した内容は、入学前の新１年生の保護者の不安を軽減するとともに、保護者同士及び学校と家庭間の良好な関係づくりを行うことである。就学時健診や入学説明会で来校する機会を利用し、保護者へのアンケート結果を反映した自作教材による情報発信や保護者会の工夫を行った。就学時健診では「学校と家庭とで共にお子さんを見ていきましょう」と言葉を添えて自作教材を配付した。保護者からは「子どもと一緒に見られる内容で良かったです」「家に帰って小学生のお兄ちゃんも一緒に見て、小学校の様子について更に話ができました」等をはじめとする肯定的な意見を得ることができた(図５)。保護者会の内容は、顔合わせから子育てについての情報交換などへ、と回数を重ねるごとに保護者同士の関係を深めていけるよう留意し複数回実施した。最初は緊張していた保護者同士も次第に和やかな雰囲気となり、会の後半には活発な意見交流が生まれた。聞き取り調査や事後アンケートからは「これから一緒になる保護者と顔見知りになれて良かった」「和やかに話ができた。良い会だったと思う」などの意見が出された。これら保護者や年長児への入学前の支援双方が保護者の不安を軽減し「子どもも親も安心です」という言葉に表れることとなった。段階を踏んだ働きかけや学校と入学前の保護者及び保護者同士が温かな時間を共有できたことで、共に手を携え子どもに関わる良いきっかけづくりとなったと考える(図６)。

図５　資料を読む保護者

図６　保護者会の工夫

校内の協働体制づくりから始めた幼保小接続へ向けたこれらの実践により、入学前の準備・体制づくりが整った。

②　スタートカリキュラムの実施（平成29年度の実践）

ア　入学直後の様子

平成28年度の実践の成果を基としながら、平成29年度がスタートした。入学式では、終始落ち着いた態度で式に臨み、きょうだいが小学校にいないにもかかわらず校歌斉唱の際には数名の新１年生が一緒に校歌を口ずさむなど小学校の一員としての意識を持ち、式に参加していると推察される姿が見られた。交流時の校歌のプレゼントが生きているエピソードである。保護者からは「小学校に入学することに対して、最初は子どもが『保育園と違うから心配』と言っていました。でも、交流の後は楽しかったことや『あそこに靴箱があって、教室の隣に図書室があるんだよ』などと小学校について家でもたくさん話していて、逆に入学することを楽しみにしていました」「入学式は、すっと当たり前のように校舎の中に入って行きました。入学後は学校の様子や友達の様子を楽しそうに話しています」などの感想を得られた。保護者の目を通した

年長児の交流後の変化や入学を楽しみに待つ様子、入学式当日の姿などからも交流を通して入学への期待感や安心感が育まれていたことが分かる。図７は昨年度末の５－５交流で作成した壁面飾りである。新１年生を温かく出迎えている。入学に合わせて教室に貼られたこの壁面飾りを見て、児童からは大きな歓声が上がり、嬉々として自分の自己紹介のカードを探す姿が見られた。入学後は、このような児童の姿が散見され入学前の交流で目指した安心感の素地づくりの成果を十分に見ることができた。

図７　壁面飾りを見る１年生

イ　スタートカリキュラムの実施

年度当初の学習内容は、昨年度の教職員研修で共通理解を図ったスタートカリキュラムを基に進められた。研修の中では、児童の安心感を育むための視点として、入学直後は新たな人間関係を築くことをねらいとした学習や生活科を中心とした合科的・関連的な学習を取り入れること等を示した。これらを、児童の姿に柔軟に対応し小学校の学びへと滑らかにつなげられるように適切な時期及び重点を踏まえ、学習活動の配列の組み方等について演習を行った。４月からは、本校が今まで積み上げてきた内容を基礎として、研修での視点を生かしながら児童の姿に合わせ指導を行った。１年担任からは「昨年の研修でやったスタートカリキュラムを意識しながら１学期は指導を行った。入学直後は、意識して友達と関われるゲームや活動を朝の活動などに取り入れた。このような活動は、子ども同士の人間関係を築くことに効果があった。同時に担任と子どもとの関係を築くのにも良いと思った」などの意見を得られた。この言葉通り、特に入学直後は人間関係を築くことに重点を置いた指導の工夫が見られた。図８に見られるような、教科のねらいを十分に踏まえた上での、友達と関わり合ったり共に考えたりする活動を多く取り入れた学習などである。例えば、音楽科では曲に合わせて歩く・スキップ・輪になって、など身体を動かし友達と十分に関わり合える授業づくりを行っている。汗びっしょりになりながら、友達と共に笑顔で活動できる時間となっている。生活科の学校を探検する学習では学校の公共性に目を向け廊下の歩き方のルールを学ぶことなどや、生活科から広げ探検で見付けた教具を使った体育科の学習、見付けた事柄について発表し伝え合う学習などの合科的・関連的な授業づくりを行った。また、朝の時間を有効活用し、遊びを通した異学年交流等も積極的に実施し、児童が楽しい気持ちで一日のスタートを切れるようにと配慮している。このようなスタートカリキュラムの実施により、幼児期の学びを巧みに小学校の学習スタイルへとつないでいる。

図８　生き生きと活動する１年生

図９　子どもの学びを支える環境構成の工夫

同時に、環境構成の工夫も行っている（図９）。児童が安心感を感じられたり学びのきっかけをつくったり、あるいは自然な交流が生まれるこ

とで、自分の考えを確かめたり友達の考えを聞いたりできるようにと、掲示物の工夫や机の並べ方、先生や友達と近くで行う読み聞かせなど、幼児教育での学びを生かしやすい場を意図的に設定した。さらに、入学直後の職員の支援体制も充実し、給食の準備や学習の支援が行われている。これらの配慮がちりばめられた指導・支援により、児童の表情は明るい。新１年生の支援に関わった養護教諭からは「例年よりも子どもたちが保健室に来室することが少なく落ち着いている。緊張することなく小学校生活に入れた成果ではと感じた」との記述を得られた。１学期の１年生の不定愁訴が起因とみられる保健室利用はほとんどなかった。安心感を持ち学校生活を送ることができていると考えられる。

(2)　小中連携の側面から

新里地区には三つの小学校があり、卒業生は一校の中学校へ進学する。少人数で過ごした本校の児童の多くは、進学を楽しみにしている一方大人数の中学校生活に不安を抱えている一面もある。小中連携ではこの実態を踏まえ、児童が進学への見通しを持てるようにすることで、接続期における安心感を育むことを目指し取組を実施する。

①　教育活動の見直し

本校は、中学校と地理的な距離があることから、現行の教育活動を小中連携の視点から見直し、諸行事等の機会を効果的に活用して小中連携を図ることから始めた。

ア　中学生職場体験の工夫

職場体験に来た中学生から、中学校生活について話してもらう機会を設定した。中学生からは、自分が今頑張っていること、部活動の話などから始まり、小学校と中学校との違いについて、体験を通して中学生の目線から感じた事柄などについて、話してもらった。中学生からの「授業時間が45分から50分に変わること、この５分の違いが結構長く感じた」という素朴な感想に６年生は大きく反応し、驚く様子が見られた。また、「小学校は、単元が終わるとテストとか細かくやるけど、中学校は中間テストや期末テストがあって、その時は1時間目からずっとテスト」という言葉には嘆息するなど小学校生活と比較して学習面では大きく変わることに率直な反応を見せていた。６年生からは「一日の勉強時間は、どれくらいですか」「部活はどんな部活がありますか」などの質問が出され、知りたいことを詳しく中学生から教えてもらうことができた。中学生もこの交流のためにメモを作成し事前準備をしっかり行い臨むなど、先輩として後輩の役に立てれば、という姿勢が見られた。最後には、自分の失敗談も交えた話を披露し、生活面も含めた的確なアドバイスを６年生に対し行っていた。６年生も、中学生から生きた情報を得ることができ、「中学のことがいろいろ分かった」と中学進学に対する見通しを持つことができた(図10)。

図10　学校生活を話す中学生

イ　国語科の学習及び図書活動の工夫

本校は、図書活動と校内研修を関連させ読書活動の推進を行っている。図11は、中学校の図書主任と連携を図り、ＤＶＤを介しビブリオバトルを行った様子である。中学１年生の国語科指導の中で実施したビブリオバトルを生かして実施した。中学生が本の紹介をする様子を撮影し、小学校全学年へ紹介した様子である。どの児童も卒業生が出ていることもあり、真剣に見ていた。終了後のアンケートでは、ほとんどの児童から「またやって欲しい」という回答が得られた。高学

図11　ビブリオバトルの様子

年の児童からは「図書室へ行ってみようかな、という気持ちにさせる効果があるのでは」という感想があった。また、ＤＶＤの内容は、ビブリオバトルだけではなく中学校生活の様子も話してもらえるように予め依頼してあったので、中学校生活の様子も紹介された。卒業生の飾らない言葉に、時には笑いが起こる様子も見られたが児童は興味を持って聞き入り、中学校生活での戸惑いや頑張っている体験談を通して、中学校生活の様子を感じ取ることができたと考えられる。また、ビブリオバトルで使用した本の紹介カードと、カードの様式を送ってもらい、６年生の国語科の学習の中で、自分のおすすめの本を紹介カードに書く活動に取り組んだ。６年生にとって最も難しかったのが、キャッチコピーを作ることだった。あらすじとは違う短い言葉で、人の関心を引けるように書くことが難しかったようで、中学１年生が書いたものと自分の書いたものとを比較しながら書いていた。書き方や他者に良さを伝えるためのレイアウトの仕方などが大いに参考になったようだ。また６年生の学習で使用したカードは、廊下に掲示し校内への取組へとつなげた。図書の紹介カードの中から、読んでみたい本を選んで下学年の児童に投票してもらえるようにした。「来週から図書室で借りることもできます」との表示をしておくと、興味を示して心待ちにしている児童も見られた。連携を図ったことにより、中学生の学習が６年生のお手本となり、小学校全体の読書の幅を広げることができた。特に６年生にとっては、同じ学習に取り組んだことにより、中学生の学習の質の高さを、実感を伴い確認できる機会となった。

②　部活動と小学校諸行事との連携

高学年児童の水泳記録会へ向けた練習において、中学校水泳部との合同練習を行った。練習では、中学生が主体となり、見本となって泳いだり、共に泳いだり、一人一人に丁寧なアドバイスを送ったりする姿が見られた。高学年の児童からは、「中学生がすごく泳ぐのが速くて、びっくりした」「丁寧にやさしく教えてもらったり、泳いでいるときに励ましてもらったりして、いつもは苦しい50mが楽しく泳げた」などの声が聞かれた。また、事後アンケートでは「泳ぎが速い人について行って速く泳げるようになった。タイムも速くなりました」「スタートで思いっきり蹴って指先から入ることを教えてもらったので、それをやったところが勉強になりました。自分でもうまくいったなと思いました」などの記述が見られた。どの児童からも好意的な感想を得られた。水泳部の生徒から直接泳ぎ方のポイントを教えてもらったり、同じ小学校からの卒業生が力強く、そして速く泳ぐ姿を実際に見たり、競泳してもらったりする活動を通して、中学生を身近な存在として感じるとともに頼もしいと感じることができたと考えられる（図12）。

図12　中学の水泳部員に水泳を教えてもらう高学年児童

③　中学校区内における小中連携

本校では、家庭と連携して生活リズムを中心としたチェックを行ってきている。今年度、改めて学力向上の一環として行っている計算・漢字コンテストの結果と過去の生活チェックの点数による結果とを比較したところ、双方の結果に重なりが見られた。また、文部科学省やベネッセ教育総合研究所等から出されたデータ等からも学力と生活リズムとの関連が顕著に表れていることも分かった。このため、今年度より校内研修や学力向上と生活リズムのチェックを関連させた取組を行こととした。内容は、規則正しい生活リズムの確立とアウトメディアである。家庭へは、刷新した生活チェックカードにより、生活リズムを点数化し規則正しく生活が送れているかを可視化できるようにするとともに、アウトメディアで生み出した時間に、家族とのだんらんの時間を持ったり読書や学習に取り組んだりできるよう呼びかけた。また、桐生市内の養

護教諭部会において、桐生市の児童の多くに朝具合が悪い、だるいといった理由での保健室利用が見られることが課題として出された。原因を探ると、夜遅くまでゲーム等のメディアに触れていることにより、睡眠時間が不足していることが浮き彫りとなった。新里地区の小学校、中学校でも同様の課題が継続しており、学力とも深く関連することから、今年度より小学校３校、中学校１校、計４校での小中連携でアウトメディアの取組を実施する運びとなった。

地域での小中連携を図るに当たり、統一した基準や様式を定める必要性が出てきた。そこで、本校の様式を基とした生活チェックのカードを新里地区で統一して用いることとなった。同一歩調で地区の家庭を巻き込んだ取組を行うことは、９年間を見通した取組となるため、より良く定着が図れると期待できる。

図13　中学生と共に考える保健委員

夏休みに入り、第１回目の新里町内小中学校合同保健委員会が行われた。各小学校の紹介が行われた後、小中のメンバーが入り混じり、グループごとでのワークショップとなった。中学生のリードにより真剣な表情で考え、意見を発表する小学生の姿が見られた。また、中学生も話合いが充実するように声を掛けたり、うまく言えない小学生の意を汲んでまとめようとしたり、積極的に小学生へ関わる姿が見られた。最後のまとめでは、メディアのメリット、デメリットについての話合いの結果を発表した。そこでは、中学生の頑張りを多く認めることができた。例えば「友達」のキーワードでは、中学生が「インターネット上でも仲良くできる良い友達もいる。しかし、逆に犯罪に巻き込もうとする友達もいる。インターネット上では、良い友達と悪い友達の両方の友達と接することになる」とまとめた。小学生からは出されることのない視点に、児童は感心し熱心に聞き入っていた。また、参加した児童からは、「他の学校でも同じような取組をしていて心強かった」「意見を上手に言えなかったが、中学生が意見をまとめてくれたので良かった」との声が聞かれた。６年生からは、「発表の仕方が上手。理由は、話合いで出た意見を項目ごとに分けて発表していたから」などの記述も見られた。中学校の教諭からは、「中学生からも今回の交流を通し、『小学生と関わり合えたことがとても楽しかった』などの発言が多くあった。小学生をリードしようと大変意欲的に取り組む姿も印象的だった」との感想が得られた。これらのことから、地区内の小中連携の取組を通し、互いに刺激し合い学ぶところが多かった交流となったと考えられる（図13）。

(3)　地域の幼保小中連携会議との関わり

今年度、「自主的に各園、学校の状況を伝達し合い、会員相互の親和協力により新里地区の子どもたちの健やかな成長を促す保育、教育の充実振興を図ること」を目的として新里町幼保小中連携会議が発足した。今年度は、互いの教育現場の理解・異校種の実態把握として保育・授業公開を行うこととなった。幼児教育から中学校教育までの縦のつながりを意識できる参観は、子どもの発達段階を理解したり学びのつながりを意識したりすることになり、指導力の向上へとつながる好機であると考える。今後は、各校の連携における実践を紹介し合える機会が得られるよう働きかけをしていきたい。

3　実践の結果

(1)　幼保小連携の側面から

異校種交流を行う際の基盤として、校内の体制づくりを重視した。教職員研修では、組織的な対応のよさについて理解を図った。事後アンケートでは、約９割の教職員が

「大変良く理解できた・良く理解できた」と回答し、協働体制の大切さについて再確認できる場となった（図14）。また並行して日常の働きかけや会議での提案等も繰り返し行ったことにより、徐々に校内での理解が深まった。交流の取組の広がりや、交流日に年長児とその保護者への授業公開に全学年で協力するなどの学校全体で実践を支える取組などからも連携を円滑に実施できる環境が整ったと考えられる。大きな価値ある一歩である。交流の実践は、保育者からの「子どもたちも『楽しかった』と話していて、家庭でも楽しかったことをたくさん話したようです。このような交流会を通して、園児たちは小学校への進学にますます期待が高まり、とても良い活動だと思います」との記述や、交流後に小学校へ届けられた年長児の絵や手紙の内容からも、年長児の小学校入学への期待感を高め安心感の素地を育むことができたと考える。手紙の内容は以下の通りである(抜粋)。

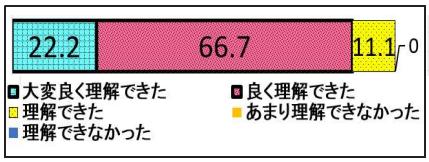

図14　組織的な対応のよさについて

・かわいいどんぐりでてづくりのこまでいえにかえってあそびました。あとけんだまもたのしかったです。ありがとうございました。
・たのしかったです。またこんどあそびにいくのおたのしみにしています。しょうがっこうにいくのおたのしみにまっています。　（２例とも原文ママ）

このような素地ができたことで、春休み中には、入学前の新１年生数名が校庭に遊びに来るなどの行動へとつながった。遊びに来た際には、「先生」と言いながら、筆者のもとへ笑顔で走り寄ってくる様子が見られるなど、入学前から小学校への親しみを持つ様子が見られた。また、新６年生に手を引かれて入場した入学式で小学校の一員としての意識を持ち参加していると推察される姿からも、交流での楽しい経験に支えられ、小学校を近く感じ慣れ親しんだことがうかがえる。今回の実践は、子どもたちだけでなく私たち教職員や保育者にとっても学びを生むものであり、互いの教育を把握し合える良い機会となった。互いの子どもたちへの接し方や実際の子どもたちの様子を知るとともに、異校種の子どもたちとの触れ合いや支援を通し、経験を伴った深い理解へとつなげることができた。保育者からは「教師間でも打合せ(交流用支援シート等）で互いのねらいを知ることにより、より一層視点を定めることができ支援や評価もしやすかったと感じた」などの感想が出された。本校の教職員からは「初めての交流会、今後も続けていってほしい。一人で入学することの不安は、大きいものだと思う。今後の交流会も楽しみだ」などの記述が見られ、子どもたちが意欲的に関わり合い、笑顔が多く見られた交流会の様子に連携の必要性を感じたようだ。

交流の実践が子どもの成長を促した。そしてそれを目の当たりにした教職員の心をも動かし、継続的な取組を保証する新たな教育課程の創造等へと結び付いた。さらに今年度当初の本校の教育グランドデザインにおいては、幼保小の連携が明記され全職員の共通理解の下、取組が進められており定着を図る段階へと進展した。校内での協働体制を構築したことが、保護者も含めた入学前後のきめ細かな支援を後押しし幼保小の連携が促進された。これらの実践は、幼保小の円滑な接続を実現する礎となった。入学後の１年生は、安心感を持ち小学校生活のスタートを切り、生き生きと明るく小学校生活を送ることができている。児童の笑顔が、一番の大きな実りある成果である。

(2)　小中連携の側面から

行事や教育活動の機会をとらえ、小中連携を進めてきた。今回の実践を通して感じたことは、適切な場や機会を設定することで、子どもたちは自ら関わり合い、互いの姿から学び合うことができるという点である。今回は、職場体験や部活動との連携等が切り口であったが、児童の心を特に動かしたのは、小中という接続の段差にいかに

中学生が向き合い克服していったのか、今、中学生はどのように活躍しているのかを生の声で聞いたり、中学生の姿から直に感じ取ったりすることであったように感じる。それは、職場体験に来た中学生からの話を真剣に聞き多くの質問をする姿であったり、水泳部員との交流や合同保健委員会で、力強くリーダーシップを発揮し教え導く中学生の姿に感銘を受けたりする姿からも見取ることができた。また、中学生と同じ学習活動を行う交流では、「中学生の文章表現が上手で、すごく本の良さが伝わってきた」「６年教室に来て読み聞かせをしてもらいたい」「中学生と一緒に競争したい(水泳)」などの感想が出された。中学生の姿は児童にとって目標となる目指すべき姿だと感じられたようだ。交流を通し、卒業生が中学校で頑張ったり、時には失敗をしそれを乗り越えたりしながら学校生活を送っていると感じられたことは、児童にとって心に残る経験だったようだ。このような、中学生と触れ合い関わり合える着実な経験の積み重ねが、児童の安心感につながったと考える。

今回の小中交流の取組は、連携の第一歩となるものである。子どもたちにとって、必要な事柄を自ら考え選択し情報を得ること、そして相互に関わり合いその関係性の中から課題に向き合う姿勢などの本質的な部分を見い出し学び合うことは大変重要である。これらの点は、幼保小の連携と小中の連携との大きな違いであると感じる。これらの視点を持って、小中交流の機会や仕掛けをどのように設定し実践を重ねていけるかが、連携の充実へとつながる鍵になるであろう。

Ⅳ　研究のまとめ

今回の実践を通し、教職員の協働体制の構築が図られたことは、大変意義のあることだった。学校が一枚岩となり、共に連携について考えられたことが追い風となり、幼保小中の連携を進める推進力となった。

これら両接続の実践を通して見えてきたことがある。幼保を含めた各学校段階では、保育者・教職員による子どもへのアプローチの仕方は違い、表に見えてくるものは異なる。しかし、その根幹には、子どもを「より良く成長させたい」という共通の思いがあることだ。互いの教育を理解し尊重し合うとともに、子どもたちのために何ができるのか、と共通の思いを持つこと、さらに、どのような手立てで迫っていくか共通理解を図り、協働していくことが重要であると考える。幼児教育と中学校教育、これら二つの学びの両輪を一貫した学びのつながりという一本の軸でつなぐことを、教育に携わる私たち教職員が意識していかなければならない。幼保等も含めた各学校段階の保育者・教職員が意識して実践につなげていくには、幼保小中連携会議の更なる充実が必要となってくる。異校種の保育者・教職員が一堂に会するその場で、子どもの一貫した学びを支える教育の充実及び一貫したカリキュラムの創造へ向け、子どもたちの学びのつながり・連続性を理解し、そして話し合い、交流を重ね、保護者・地域へ発信していかなければならないと考える。

子どもの姿に寄り添い、学びのつながりを意識した基盤づくりを目指し、試みる。そのような教職員の姿が、児童一人一人の学びを支え育む原動力となるであろう。今後も、地域の状況を踏まえつつ、実施可能な方法を探り、実践、検証を行い、子どもの一貫した学びのつながりを支える教育を、一歩一歩進めていきたい。

〈参考文献〉

・文部科学省 国立教育政策研究所「スタートカリキュラムスタートブック」(2015)
・文部科学省 国立教育政策研究所「初等中等教育の学校体系に関する研究　報告書２
小中一貫教育の成果と課題に関する調査研究」(2015)